



Title	Plunging into Pensiveness : Ghosts of Velocity in Don DeLillo's Fiction
Author(s)	矢倉, 喬士
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55704
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 （ 矢 倉 喬 士 ）	
論文題名	Plunging into Pensiveness: Ghosts of Velocity in Don DeLillo's Fiction (愁いの中へ飛び込んで——ドン・デリーロのフィクションにおける速度の亡霊)
論文内容の要旨	
現実には速度に基づいている。ある現実の速度を変えると異なる現実が立ち現れる。これはドン・デリーロの文学における核心的テーマである。とりわけ、デリーロはスローモーション映像に強い関心を抱いている。スロー再生された映像は、その鑑賞者たちが通常速度の生活において見逃していたものを発見する契機をもたらし、個人的な記憶に留まらず、公的な歴史をも塗り替えてしまう可能性を秘めている。 デリーロがスローモーション映像に関心を持つきっかけになったのは、1963年のJFK暗殺事件と、それを記録したザプルーダー・フィルムである。デリーロは、あの事件がなければ自分は今とは全く違った作家になっていただろうと述べており、事件から受けた強い影響を自認している。彼が特に衝撃を受けたのは、ハンディカムによって撮影されたザプルーダー・フィルムの映像である。ダラス市内をパレード中のケネディ大統領が射殺される瞬間を記録したこの映像を、スローモーションで繰り返し見たデリーロは、致命的な一撃がケネディの前方から撃たれたものとは思えないと述べている。ザプルーダー・フィルムは、スローモーションで繰り返し再生されることで、アメリカの歴史を全く違ったものへと開くきっかけとなった。JFK暗殺とザプルーダー・フィルム以降、アメリカは混沌の中に突き落とされ、国民が共有できるアメリカというものを失ってしまったとデリーロは述べる。 本論文の目的は、ドン・デリーロのフィクション作品が、速度の変更という手段を用いていかに見過ごされた事物を浮かび上げさせ、現実を変容させているかを彼の6つの小説を通して分析することである。具体的には、『マオII』(1991)、『アンダーワールド』(1997)、『ボディ・アーティスト』(2001)、『コズモポリス』(2003)、『墜ちる男』(2007)、『ポイント・オメガ』(2010) の6つの作品を分析し、デリーロがいかにしてアメリカを、予想だにしない別アメリカへと変容させているかを考察する。 上記の6作品の考察によって、本論文は1950年代から2010までの約60年に及ぶアメリカの歴史を扱うことになる。そして、デリーロが描くのは、公の教科書的な歴史というよりはむしろ、見過ごされた者たちの歴史、あるいは「アンダーヒストリー」とも呼ぶべき歴史である。デリーロは、スローモーション映像が些細なものへと関心を移すことを可能にし、新しい現実を立ち上げさせることにヒントを得て、公的で大きな歴史が取り合おうとしない些細な事物や者たちに光を当てる。しかしながら、ザプルーダー・フィルムがJFK暗殺事件にまつわる唯一絶対の真相を明らかにすることがなかったように、デリーロの作品もまたアメリカ史における全ての謎を解き明かすことはない。デリーロの作品の力点は、ゆっくりと深い視座を持てばより真実らしい真実に到達できるということにではなく、現実には常に別の現実へと変貌する可能性を秘めているということにある。彼の作品が、陽の目を見なかった些細な事物に光を当てることに成功しているとしても、それでもやはり気付かれずして見過ごされたままの事物が存在し、彼の執筆活動自体が新たな弱者を生み出し、その隠蔽に加担する可能性すらあることにデリーロは自覚的である。読者は、他なる現実の到来を待ちながら、性急な判断を避けつつ、熟慮のうちへ身を投げ出すように要請を受けるのだ。 結論部では、これまでの議論をまとめながら、21世紀の文学的潮流におけるドン・デリーロのフィクションの役割について考察する。モダニズム、ポストモダニズム、ポスト・ポストモダニズムといった文学的・思想的潮流が提示されてきた中で、デリーロはそのどれにも収まることのない作品を書き続けている。彼の作品内でキャラクターたちが、理論を構築した次の瞬間にはそれを否定し、理論を暫定的なものに留めるように、デリーロの作品それ自体もまた、理論化に抗う。ある現実には、速度を変更すれば別の現実へと生まれ変わる。このことは、ある作家やある作品に置き換えても成立する。デリーロのフィクションは、文学的潮流や何らかの思想の枠をあてがわれた結果として、一つの速度での振る舞いを強制されることを拒む。それは、当代の文学に期待される役割に必ずしも作家が歩調を合わせる必要はないという主張であり、文学が都合の良い道具として使用されることへの抗いでもある。デリーロの文学は一定の思想や役割に還元されることなく、他なる文学へと変化する機会を待ち望んでいる。	

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (矢 倉 喬 士)			
		(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	言語文化研究科 教授	渡 邊 克 昭
	副 査	言語文化研究科 教授	貴 志 雅 之
	副 査	言語文化研究科 教授	畑 田 美 緒
	副 査	言語文化研究科准教授	木 原 善 彦
	副 査	言語文化研究科准教授	中 村 未 樹

論文審査の結果の要旨

本論文“Plunging into Pensiveness: Ghosts of Velocity in Don DeLillo’s Fiction”は、現代アメリカ文学の巨匠ドン・デリーロ文学における速度表象に着目し、『マオ II』(1991)、『アンダーワールド』(1997)、『ボディ・アーティスト』(2001)、『コズモポリス』(2003)、『墜ちる男』(2007)、『ポイント・オメガ』(2010)といった、6つの後期作品に描かれたスローモーションの効用を精緻に分析することにより、速度に取り憑かれてきた未来志向のアメリカ的価値観がいかに脱構築されるか、多角的に追究しようとした野心作である。

本論文の独創性は、これまでのポストモダン文学研究においてほとんど議論の俎上に載せられることのなかった「反速度」、言い換えれば「スローなスピード」に焦点を絞り、メディア映像やその反復的な再生がスピードと織りなす問題系がどのように深い洞察を育み、グローバリズムやアメリカ文明のクリティークをなすかを、綿密なテキスト分析を通じて明らかにしようとしたところにある。このような着眼点に加えて、本論文が高く評価できる点としては、執筆者の真摯な思考の軌跡を窺わせる論理展開の巧みさを挙げることができる。先行研究を十分咀嚼したうえで、多様なテキストの読みから主要な論点を的確に抽出するとともに、錯綜する議論を一つ一つ丹念に解きほぐし、そこにさらに捻りを加えて厚みのある独自の見解を導き出そうとする手際は鮮やかである。論述には首尾一貫した問題意識と説得力が備わっており、学術論文として非常に読み応えがある。

序章においては、一九六三年に起った JFK 暗殺事件と記録映像ザプルーダー・フィルムによって、アメリカの現実が劇的に変容したことに強烈な衝撃を受けて作家を志したデリーロが、『リブラ』(1988)以降、スローモーション映像とリピート再生のモチーフを繰り返し登場させていることがまず指摘される。そのうえで、事物の見過ごされていた側面を浮かび上がらせるスローモーション映像によって、潜在意識下にしか存在しなかった些細な事物や人間たちがいかに浮き彫りとなり、そこに立ち現われた「超現実 (superreal)」、「深層現実 (underreal)」といったものが、どのようにして深遠な思索の導きの糸になるのかという問いかけが提起される。

『マオ II』(1991)を論じた第一章においては、小説家とテロリスト、民主主義と全体主義、商業主義と芸術のための芸術といった二項対立を扱っているように見えるこのテキストが、「ゆっくりとした深い視座」を通して、見せかけの対立の裏に隠された共犯関係を炙り出していることが緻密な論理展開によって検証されている。民主主義と全体主義とが不可分に織り合わせられた状況をテキストから丹念に抽出することにより、冷戦終結後も対中国を念頭におき、二分法による思考によって世界秩序を維持しようとしてきた合衆国の国家戦略が批判的に描出される。その過程において言及される主人公の芝居がかった演技性に関する鋭い考察は、この小説の批評史に新たな視座から一石を投げようとする意欲に満ちており、高く評価できる。

第二章では、長期にわたる冷戦期アメリカ、並びにポスト冷戦期を射程に入れたデリー口の代表作『アンダーワールド』を取り上げ、この膨大なテキストが、急がず深く事物を観照しようとする視点を提示することによって、米ソの見せかけの対立構造が、実際には資本主義的利益追求の共犯関係にあったことを鮮やかに例証している。そのうえで、彼自身の文学を含む芸術活動が、核の影や資本主義下で不可視化された人々への注目を促し、救済の一助となる一方で、それ自体が新たな犠牲者を生み出し、芸術活動をも脅かしかねない複雑な力学に晒されているという知見が、鋭い問題意識とともに提示されている。

デリー口の異色のノベラ、『ボディ・アーティスト』を論じた三章では、この作品をめぐる一見現実離れした状況が、冷戦後も、例外主義に基づいてパックス・アメリカナを夢見るアメリカを浮き彫りにしているという野心的な読みが導き出される。速度を落とした身体パフォーマンスを通して自己の身体を外部へと開き、他者を体に憑依させる女性主人公が、搾取されてきた異国の者たちや、将来に待ち受ける破局に思いを馳せるという読みは非常に斬新であり、これまでの解釈の枠組みを揺るがすインパクトがある。

第四章では、『コズモポリス』に焦点を絞り、新自由主義世界の覇者として、無限に加速するサイバー資本の蓄積に身を委ねる主人公の死へ至る道筋が、速度との関係において綿密に検証されていく。その過程において、サイバー空間を減速することにより、九十年代というアメリカの十年間において看過されてきた他者とその痛みを目を向けることの意義が、説得力をもって説き起こされていく。とりわけ、現代の人間が、様々な速度に引き裂かれるように存在しているという考察は、本論が今後さらなる展開を摸索するうえで熟考に値する貴重な視点を示しているように思われる。

第五章では、9・11を扱った『墜ちる男』を論じるにあたり、犠牲者の数では遥かに上回るルワンダやカンボジアの虐殺よりも、9・11がなぜ記憶に値するものとして記憶されてきたのかという疑問がまずもって提示される。それに対する応答として、ツイン・タワーがハリウッド映画のように相次いで倒れ、世界中に繰り返しテレビ放送され、偉大なるトラウマの構図が確立したことが指摘され、9・11を複数化し、脱神秘化しようとするデリー口の戦略が明確にされていく。とりわけ、リアンがイスラモフォビアや監視社会化願望を克服しようとする過程を丁寧に分析した論述は異彩を放っており、対テロ戦争へ向けて危険な団結へと向かうアメリカに対して、スロー・スピードで「他なるアメリカ」を提示しようとするデリー口の姿勢を鮮やかに解明している。

第六章では、イラク戦争を間接的に描いた『ポイント・オメガ』に照準を合わせ、短絡的なスローガンを用いて、仮想敵に徹底した監視と先制攻撃を仕掛ける合衆国に対して、デリー口が「ゆっくりと、繰り返す」という手法を駆使して、この小説においても対抗を試みているという見解が巧みに展開されている。若手映画監督によるペンタゴンの防衛知識人への単独インタビューによる映画制作という主要プロットが頓挫する過程、および『二十四時間サイコ』の超低速の映像をめぐる分析を通じて、本章は、ややもすると社会の迅速な再編成を要求しがちな二十一世紀の時代思潮に対するデリー口の抵抗の姿勢を実証的に浮き彫りにしている。

以上の六つ小説のテキスト分析を通して、デリー口が、スロー・モーション映像が公的な大きな歴史が取り合おうとしない些細な事物や者たちに光を当て、見過ごされた者たちの歴史、すなわち「アンダーヒストリー」に肉薄しようとしてきたことが明らかにされる。そのうえで本論文は、映像の速度を低下させれば、隠蔽されていた事の真相が明らかになるという安易な結論に達することなく、ゆっくりと深い視座を持てば、思いもよらぬかたちで現実や他者が炙り出され、別の現実へと熟慮の回路が開けていくという、捻りのきいた明察が説得力をもって導き出される。執筆者によれば、デリー口は作家自身の執筆活

動自体がシステムに取り込まれ、新たな弱者を生み出す可能性のあることに自覚的であり、自らの文学が一定の思想や理論に還元されることなく、他なる文学へと変化する機会を待ち望んでいると結論づける。このように考えると読者は、読みを通じて他なる現実の到来を待ちながら、性急な判断を避けつつ、熟慮のうちへ身を投げ出すように要請されているという、本論文の表題にも掲げられた主張が首尾一貫して明確になる。

以上のように本論文は、緩められたスピードと熟考という独創的な視座を提示することにより、デリー口批評の新たな地平を切り拓くとともに、未来を先取りしようとする現代アメリカ文明が孕む多様な問題に対する有効なクリティークを、アメリカ研究にダイナミックに接合しようとした優れた論文である。緻密なテキスト分析、実証性に富む議論の展開、洞察力に満ちた結論により、アメリカ文学・文化研究への貢献は顕著であり、新自由主義的な効率主義、対テロへの迅速な対応を求める二十一世紀の思潮を見据え、絶えず“*But maybe not*”、“*What else?*”とスローな問いかけを文学を通して積極的に教育の場に活かそうと提言した点でも、本論文の意義と功績は大きい。

これらの点を踏まえ、各審査委員からは以下の質疑がなされた。フィルムスタディーズの知見を本論文は活かしているのか。読むという行為と、映像におけるスロー・スピードはいかに関連づけられるのか。スピードや未来に対する眼差しは、十九世紀文学との対比においてどのように異なるのか。『マオ II』ではなく『リブラ』からテキスト分析を始めてもよかったのではないか。結論で提示された「理論化への抗い」という姿勢が、他の作家の場合とどのように決定的に異なるのか。主人公の演技性と熟考性は背反関係にあるのか、相同関係にあるのか。零度やマイナスの速度、多様な速度の並列など、速度の孕む問題系をさらに複合的に捉え、副題の“*Ghosts of Velocity*”に関する洞察を深化させれば、より精巧な議論を展開することもできたのではないか。

だが、以上指摘された論点は、本論文の学術的価値を本質的に損なうものではない。本論文で示された執筆者の力量は、日本アメリカ文学学会全国大会等における五回の口頭発表においても高い評価を得ており、既に本論文の一部は、審査を経て複数回、学会機関誌、『関西アメリカ文学』、『EX ORIENTE』、『英米研究』等に掲載されている。執筆者が、次代を担う気鋭の研究者として学会で実力を認知されていることは、日本アメリカ文学学会関西支部第1回奨励賞受賞の栄誉に、本年度輝いたことが何よりも証左となろう。

本論文は、各審査委員が一致して認めるように、明晰でこなれた英文で書かれており、執筆者が恒常的に英語論文を執筆できる確かな英語運用能力の持ち主であることを窺わせる。この点においても、執筆者がこれから研究者として国際的に研究成果を積極的に発信することにより、アメリカ文学・文化研究の発展に大いに寄与することが期待できる。

上記審査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。